

柳田国男新年譜作成作業と『故郷七十年』

『柳田国男全集』編集委員

小田富英

一、はじめに

三年前にも、この開講講義として、柳田国男の生涯と思想をラフスケッチし、その年のテーマの『火の昔』についてお話ししました。その時は、三月に退職してすぐの時だったので、準備ができるか躊躇したのですが、思い切ってお引き受けし、おかげで、福崎や遠野、立川などの講演に繋げることができました。今回も、この四月から、新たな生活（作新学院大学特任教授）を迎えることになりましたので、また鎌倉からスタートするのもよいかなどと思って来ました。今日はよろしく願いいたします。

前半は、今、わたしが作っている年譜の話で、三つお話ししようと思っています。今までには、いろいろな資料から、年譜事項のAならAというひとつの事実を発見してパソコンに入力していたのですが、昨年の秋くらいから、Cという出来事を見つけると、それは、AとBを繋げることだったり、理由だったりして、年譜づくりの楽しさを感じるようになりました。そのなかで、三つの面白い話を用意してきました。

後半は、去年から読んでいらっしゃる『故郷七十年』についてわたしなりの考えをご紹介します。まだ発表していない新資料もありますので、楽しみにしてください。

二、年譜事項 三題

(1) 布佐の井上二郎のこと

レジュメの最初に、朝日新聞の千葉版の記事を載せました。これは鎌倉の皆さんも情報を早くに入手して、『柳田学舎』第110号にも紹介されたものです。これは、柳田国男の東京帝国大学時代の同級生の友人で土木工学科の井上二郎に宛てた手紙なのです。直接投函したというのではなく、日光の照尊院の住職に託して井上二郎に渡した手紙です。

日光の照尊院というのは、輪王寺の中の十五ある院中の一つです。そこに菅原という住職がいて、花袋とも親しく、柳田は、明治二十年代後半に花袋と共にお世話になっています。その菅原住職から頼まれたことを伝える手紙なのです。（この住職は、代々菅原です。手紙には、菅原英信と書いてありますが、『故郷七十年』では、菅原英俊とあります。）

井上二郎は、東大の土木工学科を卒業して、内務省に入り栃木県の土木関係の仕事をしていました。堤防、道路、治水などの工事をしていたのです。大谷川が氾濫して、堤防や崖崩れを何とかして欲しいという内容のものです。

これが発見されたのは、一年間くらい前だったらしいですが、最終的には年代がはっきりしなかったのが、新聞で公開して情報提供を待ったのではないのでしょうか。

記事の最後に、「手紙の最後に「八月四日」とあるが、年代は不明だ。」とありました。

筑摩書房の柳田国男全集の担当編集者の山本さんが千葉県に住んでいますので、すぐにこの記事を見せていただきました。照尊院ということだったので、明治三十年代と思い、作っている年譜を見ましたら、田山花袋宛の書簡との関係ですぐにわかったのです。

そこに書いてあるように、明治36年7月23日付けで、柳田は田山花袋に日光照尊院から葉書を書いています。その手紙は、牛込にある自宅を改築中なので家族大勢で日光に来ているという葉書です。『故郷七十年』でも、一夏、甥たちも連れて過ごしたとあります。柳田はその時、柳田家に養子に入って、松岡国男から柳田国男に変わった時で、柳田家の娘孝の学校卒業を待って結婚するという年だったのです。次の年の明治37年に結婚することになるのですが、父直平や母琴は、娘の結婚生活のために牛込加賀町の自宅を増改築しようとしていました。そのために柳田は皆を連れて日光照尊院に行くという時でした。そこで、田山花袋に23日に手紙を書いたので、多分その流れの8月4日だろうと思ったのです。すぐに、井上家を調査している我孫子の文化を守る会の方に、山本さんに連絡をとってもらいました。(筑摩としても、書簡集に収録するお願いをしなければならないので) たまたま、わたしの昔からの知人で、市史研究センターにかかわっている方(古代産鉄民族研究者の柴田弘武さん)もいたので、その方にはわたしから連絡をしました。すぐに、山本さんの方に、是非来て欲しいという連絡が入りました。

我孫子という町は、市民の方々がボランティアでいろんな活動をしている文化的にも充実している町でした。我孫子市史研究センターと我孫子の文化を守る会というふたつの会の方たちが合同で毎週月曜日に井上家に行き、古文書の整理をしているのです。

鎌倉の皆さん方は、すでに布佐に行かれていますので、ご存知だろうと思うので簡単に地図を書いてみます。利根川が流れています。柳田は、13歳のときに上京して一番上のお兄さんの鼎の所に来ます。こちらが布川、先ずここに落ち着いてそれから布佐の方に来ますね。

いまは、成田線の線路がここを通っているのですが、何故ここに書いたかということと木下と書いて、「きおろし」と読む駅があります。わたしは、高校時代、地質部に入っていて、木下に化石や地層の調査に来たことがあり、当時、布佐を通って来たのですが、その時、柳田の「ヤ」の字も知りませんでした。そんな思い出のある土地でした。

松岡鼎が布川から布佐に移って、医者松岡家がここにいます。その隣に、有名な気象学者の岡田武松の家があります。この近くに、勝蔵院という松岡家のお墓のある寺があります。岡谷公二さんは柳田の初恋の女性伊勢いね子のお墓をここで発見し、亡くなった日までわかった所です。

その隣に竹内神社があります。この竹内神社は、わたしたち35年以上前に後藤先生とここへ来た時には、碑があるのを知りませんでした。そのあとアメリカの研究者のロナルド・モースさんが本を書く時ここを歩き、英語の碑があり、後を見て、松岡鼎、松岡国男、松岡静雄の名前があったのを発見します。旅順陥落の祝勝の記念碑で、竹内神社に桜の木を500本寄贈したという記録でした。日露戦争祝勝ムードのなかで、日本全国、桜の植樹が始

まりますが、旅順陥落での植樹なので先がけと言ってよいでしょう。

碑には、七人の名が書かれています、その一人に井上二郎がいるのです。井上については、後でのべますが、この七人への声かけは、多分、長兄の鼎でしょう。(その中の一人、大澤岳太郎も鼎の関係です。)

大体布佐の町での位置関係はこのような状態です。井上二郎がいたのがここなのです。今の駅の反対側で、柳田ゆかりの場所を歩くコースにも入っていません。ここに井上家という、江戸時代からの旧家で大きなお宅が今でもそのまま残っています。(現・相島芸術文化村)手賀沼(柳田が弟の静雄に、手賀沼に蛸つりに行こうと誘ったいたずらにも井上がからんでいたと想像できます)がこちらにあります、井上二郎が干拓をしてこの辺は水田になりました。布佐では井上二郎は、手賀沼干拓の業績者として有名です。竹内神社の碑に記名されている 7 人の中に井上二郎の名前があると、手賀沼干拓の井上と判断してしまいがちですが、当時は、柳田も井上も、大学出たての若い官僚と技師であったことを忘れてはなりません。

いずれにしても、布佐の人たちにとっては、岡田武松と松岡国男と井上二郎は郷土の三傑といわれ、柳田と井上の関係は有名なわけですが、こういうことが、柳田を研究しているわたしたちに伝わってこない、というのがとても不思議というか、まだまだ知らないことがたくさんあると痛感させられるところで、そこがまた面白いわけです。

筑摩の編集者の山本さんと、これは明治 36 年のことなのですと挨拶に行ったとき家の中まで全部案内していただきました。井上家の現在のご当主は、東京にお住まいで、奥さまが、おじいさんから井上家の歴史をきちっと後世に残すようにと言われてきたので、やっと今になって、守る会の人たちと一緒に古文書資料の整理をするようになったと語っていただきました。そのお話でも、二郎は優秀で、学科が違って国男とも仲が良く、帰省の度に国男と二郎が、土蔵で本を読み、語り合っていたという話が代々伝わっていたのです。さらに、柳田が、二郎の事を語っていないのは、きっとライバル意識があるからだというのが、井上家の「伝説」なわけです。

柳田の布佐への帰省は、明治 30 年までは、伊勢いね子に会うことや、花袋や藤村らと青春の悩みを語らうためということになっていますが、井上二郎の存在があることに、驚きました。

後藤先生といっしょに柳田研究会のときに、柳田の大学時代の友人関係がわたしの担当だったのです。そこで東大の卒業生の名簿が官報に載っているのを、ずっとコピーして持っていました。柳田たちは、明治 33 年の卒業でしたから「三々会」という名で、定期的に同窓会を開きます。年譜にも入れなくてはならないので、筑摩の机の横に、いつもこのコピーを貼っておいて、名前が出てくる度に確認していました。

そのコピーの別ページに丁度土木工学科があり、そこに井上二郎の名もあったのです。布佐に行ったときに、井上家の奥さんにお土産として、このコピーを差し上げましたら、本当に東大の卒業生だったのだと喜んでいただきました。

井上二郎について、これからもっと調べていくと面白いことが判ってくると思います。二郎は、茨城県の農家の出身で、本名が横瀬二郎で学生時代に養子に入っています。結婚したのはいつかまだ調べていないのですが、柳田の手紙にも、「母君および内政によろしく」とありますので、家族ぐるみのつき合いであったと分かります。柳田よりも早く養子縁組をしていたと考えられます。柳田も、松岡国男から柳田国男となり、その娘孝と結婚を決意するにあたって、井上の生き方も大いに刺激となったのではないのでしょうか。恋の挫折や、「詩（うた）の訣れ」、そして、家庭の「優しい束縛」などいろいろな語られるなか、この井上二郎の生き方も入れるべきなのでしょう。

井上二郎は、茨城の裕福な農家の次男坊か三男坊だったのでしょうが、（柳田は貧しい家でしたが、）養子に行くのに江戸時代からの旧家に養子に行く、（柳田の場合は士族でした）そこには若い可愛い女の子がいる。そういう人生の選択もあると多分勇気づけられたのでしょう。

先ほどの伊勢いね子ですが、亡くなったのが明治 33 年の 3 月です（岡谷さんがお墓を発見する前、わたしは 7 月と予想していました）が、柳田の卒業と同じ頃です。伊勢いね子は結核に罹っていてここに住めなくなっています。いね子の実家は利根川の魚問屋で離れた親戚に治療のため預けられていました。それで柳田は会えなくなって、会えないうちにいね子は 1 年後に亡くなります。

いね子が亡くなってから、柳田が柳田家に養子に入るという決断の早さが、田山花袋や国木田独歩にとっては異常に見えたようです。養子に行く披露の時には、花袋も柳田をモデルにした小説の中で、そんなに急いで結婚なんかするなと書いています。そんななか、井上二郎の存在があると、こういう生き方もあるのだということを柳田が足を踏み出す一歩だったのではないかと思います。

いずれにしろ、布佐の若い男女の青春群像は、岡田武松や井上二郎の奥さんたちを含めて、とてもミステリアスで小説ネタとしても面白いところです。

もう一つ面白いのは、利根川のここ、館林には花袋がいて、銚子には独歩がいるわけです。ここに国男がいる。利根川の水脈の中に 3 人が少年時代を送っていたということは面白い事実で、同じ川の流れを見ているわけですから、こうした側面からも論じていきたいと思っています。

（2）明治 39 年北海道視察旅行でのこと

次に、柳田の年譜を一年分だけ用意しました。これは、わたしが年譜作成するにあたって、今までの何種類かの年譜の特長を示したものです。代表的なのをピックアップすると A,B,C,D,E の 5 種類あります。『柳田国男全集』の編集委員会が立ち上がったときに、レポートとして作成したものです。

そのなかの明治 39 年 1 枚だけピックアップしてきました。

A の年譜は、昭和 6 年柳田の生前のときに改造社から作られました。この年譜について、

明治 39 年については何も記載がありません。

B の年譜は、『後狩詞記』の喜寿記念会編ということで昭和 26 年に作られました。これは柳田が、自分の日記を見ながら話しているのを、井之口章次さんがまとめて年譜にしたものです。

C の年譜は、文庫のほうの年譜なのですが作ったのは鎌田久子さんです。C、D も、鎌田さんで、D の定本年譜もそうですが、柳田の日記をもとにして作っています。鎌田さんの所に柳田の日記が残っているはずなので、再三公開してくださいと後藤先生も生前お願いされました。鎌田さんからは、あれはもう残っていません、奥様が燃やされましたという返事が来てそのままになっています。奥様が燃やした日記というのは、伊勢いね子のことを書いていた恋愛日記（一部は「大学生の日記」として花袋が発表）は燃やされたのかもしれないませんが、明治 39 年とか、遠野に行った頃の明治 41, 42, 43 年ころ、一番柳田が自分で日記を見ても面白いと言っていた日記については公開されていません。昨年 1 月に、鎌田さんが亡くなりました。その遺品の整理の中で日記が発見されることを期待しているところです。日記が出てくれば、わたしの年譜の作り方も変わってくるのですが、今の段階ではそれらの日記は出てこないものとしてやっています。

面白いのは C1 の明治 39 年の「12 月 20 日帰京。」のあとで、「この年の日記の最後に『この年はとにかくよく生きたり。二ヶ月の旅行を除きて十ヶ月の間にも大分の本をよみたり』とあり、最後に『内部には新しき理想の萌芽黙しこれを物にせではやまじ』とある」。日記にこういう事を書いているのです。柳田の内面がわかるこんな大事なことが、ここでしか発表されていないというのは残念で、わたしは、こうした柳田の生の言葉を拾っていきたいと考えて年譜を作っています。

E が、わたしたちが『柳田国男伝』を刊行したときにまとめた年譜で、今言ったように基本は、定本年譜を踏襲しています。新しいことは、新聞記事や他の人の思い出話などをもとに補充したのですが、定本年譜の 1.5 倍くらいになったくらいです。日数でいうと、古くなるほど 1 年間 365 日の中で、判っているのは 1/3、1/4 というところなのですが、後藤先生が『柳田国男伝』つくるときに、わたしたちに年譜が大事だといわれたときには、その日に何を食べたのかまで書けるような年譜でなければだめだと言われました。明治 39 年の C1 のところなどは「日記によれば」と卑怯な書き方をしているわけですが、家の会があった日に、参加した人にならずし、茶碗むしなどをご馳走するわけです。このように何を食べたかもわかるような年譜を作るべきだと後藤先生から随分言われたのです。

わたしもこの 3 年やっと年譜作りに集中できたので、例えば伝記の年譜にしてみれば、明治 39 年の一番最初の項の「前年暮より一月十三日まで、興津に滞在」とありますが、この興津に滞在したのが何でわかったのかという資料をカッコの中に書いてあります。こうして作ったのが、『柳田国男伝』の年譜なのです。

ひとつの事実を資料のなかから見つけ出すというのも、年譜づくりの楽しさですが、生意気な言い方ですが、昨年くらいから、そうした単なる発見の楽しさを超えたかなと感じ

てきています。一つの発見ではなく、こっちの発見とこっちの発見が繋がるように感じる事が出来るようになったのです。例えば柳田がどこどこで講演をする、テーマは何かというときに1ヶ月くらい前にテーマに関する本を読んでいたりでするのでつじつまが合ってきたという面白さを感じるようになりました。

つじつまが合ってきたという例の2例目なのですが、「八月二十二日～十月二十日、東北・北海道旅行」と『柳田国男伝』に書いてあって、その八月二十二日から樺太へ行くまでのところに矢印をつけました。『柳田国男伝』の年譜でも六行ほどの項目です。そこに、「新年譜資料」と書いてありますが、それがNo.4の資料の八月十八日から九月十日のたった1ヶ月足らずのデータを北海道の新聞や柳田の著作など、他の人の思い出話や手紙とか入れたものです。現段階でも、一日一項目の出来事や足跡がわかっています。まだ、文章になっていませんが、わたしの仕事は、これをさらに増やして文章化していく作業となります。新しい発見もあるので、それを文章化していくのが、この三年間のわたしの作業でした。

簡単に地図を書きます。この年の旅行は、樺太へ行ったのが一番有名で、それは「樺太日記」があるので詳細にわかります。しかし、北海道の道内をどのように歩いたかというのは、この鎌田さんの定本年譜のことくらいしか分からなかったのです。『柳田国男伝』の年譜も鎌田さんの年譜を越えられなかった。でもこれだけ北海道の中の新聞だとかでわかってきたことがあるのですが、柳田は官僚ですので、インフラ整備の視察に行くわけです。例えば、留萌と釧路の築港予定地の視察です。

釧路と帯広間は、明治38年に鉄道が開通していますので、ここまでは鉄道で行くわけです。鉄道が敷かれていない所は、馬に乗ったり歩いたりしています。帯広の峠を越えるのは、馬に乗ったようです。しかし、いくら北海道の新聞を読んでも、帯広が先なのか釧路が先なのか全然わからなかったのです。そんなことどうでもいいじゃないかと言われるかもしれませんが、帯広でどういう風景を見たのか、後々柳田の著作の中に例えば「日本河川論」の文章の中に突然北海道の十勝の湿原の風景などが出てくるので、それはこの明治39年のことだろうと予想がつき、そうすると、年譜が柳田の著作を読む上での一級資料となるわけです。

帯広に木呂子敏彦さんという方がいらして、わたしも手紙をもらい、随分文通をした方です。筑摩書房にも読者からの質問のような手紙をよこしたりしていましたので、後藤先生の所にもいっていたのではないかと思います。その木呂子さんは、北海道で柳田がどのように歩いたかを克明に調べた人なのです。3年くらい前から本気で年譜をやらなければいけないと思い、木呂子さんの手紙を思い出して、木呂子さんの論文に書かれていない事を知りたいので会っていただけないでしょうかと手紙を出しました。そしたら、息子さんの真彦さんから返事が来て、数年前に亡くなりましたとありました。

真彦さんは、神戸に住んでいらっしゃるって、わたしが、福崎で講演をした時に、わざわざ聞きに来てくださいました。その時、お父さんの敏彦さんが書かれた論文の根拠などをお聞きし、いくつかの資料をすぐに送っていただきました。

その敏彦さんの論文には、帯広に伏古というアイヌの部落があり、そのリーダーの伏根弘三さんの聞き書きをして、柳田が明治 39 年に帯広に来た時に、伏根さんが作ったアイヌの学校を見に来て、伏根さんと意気投合したということなどが書かれています。同様の内容の葉書通信もあります。そこに書いてある「独言独語」というのがそれです。

となると、明治 39 年には、「帯広でアイヌの学校とアイヌの伏古コタンの伏根弘三さんとあって意見があい感激した。」と年譜の文章に出来るのですが、木呂子さんが亡くなられたのでもう一回確認をし、どんなように意気投合したのかを聞くことが出来ないのです。

この伏根弘三さんというのは、大正 15 年に啓明会で柳田がアイヌの人たちの「眼前の異人問題」という講演をする時にも伏根弘三さんと呼ばひ、アイヌの生活についての話を聞く場をつくります。伏根弘三さんは息子を連れて来て、柳田の写真集には昭和 3 年アイヌの伏根弘三と息子だれだれと出ているのですが、昭和 3 年というのは間違いで、大正 15 年というのが木呂子さんの論文ではっきりしたのです。

その後、柳田は、樺太を視察しながら、アイヌの人たちの住宅の特徴を細かく調べています。明治 39 年、北海道を官僚としての仕事の合間に、アイヌの人たちの生活や歴史に興味を持ったということがはっきりしたのです。

木呂子さんが言いたかったのは、柳田のアイヌへの関心が消えていったという谷川健一や梅原猛らの論調に異を唱えるものでした。

それで、この大正 15 年に伏根弘三を呼んだ時の講演をわたしも今回もう一度読んで改めて木呂子さんの論を評価しなければと思いました。柳田は、晩年、「日本人とは事大主義」と結論づけているとよく言われますが、もうこの時期から「事大主義」という言葉を使っているのです。

そのつじつま合せで、わたしもびっくりしたのですが No.5 のゲラはこの次に出る全集のゲラです。わたしがここの解題を書くので、そこで「自選歌集」を読んでいてびっくりしたのです。本当は『定本』にも載っているのですが、ここでびっくりというのは、勉強不足と言われても否定はできません。しかし、『定本』の時には、来嶋さん以外注目した研究者はいなかったのではないのでしょうか。

明治 39 年の歌です。面白いことに、付記がついているのです。「たまさかにとりてほしたるしらぬかの あいぬのこふをぬらす雨かな」という歌の付記にはこう書かれています。

「此歌ハ九月六日十勝ノ帯広ヨリ」ということは 9 月の 6 日に帯広を出て汽車に乗って、午後白糠を通過して、その日は天気がいい日で海岸でアイヌの人たちが昆布を干しているのを見た。釧路で築港の予定地を視察して、釧路で泊まって次の日に帰る。9 月 7 日のわけです。9 月 7 日は土砂降りの雨なのです。電車の中で昆布が悪くなってしまうのではないかと、可哀想だといっている汽車の中の人たちの声を思い出しながら作った歌なのです。本当にそのままの歌なのですが、日にちがはっきりして 9 月 6 日帯広を発って、釧路で築港の視察をして、雨の中きのう晴れているときに干していた昆布を見ながら帯広へ帰る。帰って帯広の伏根弘三のアイヌの学校を見学する。日にちでも、つじつまが合ってきたのです。

となると、わたしが作る年譜が、「帯広から釧路に築港予定地の視察に行き、次の日、雨の中帯広に帰る。」という文章では全く柳田の内面を反映していません。

ここが、これからの年譜づくりの難しいところです。

なおかつ、「あいぬのこふ」を心配している柳田を強調しすぎると、海の民アイヌの、土砂降りの中昆布が雨でぬれるくらいは想定内だという声も消し兼ねません。アイヌの人は、風の匂いとか湿気で何日後には雨が降るという事を予想しながら漁業や山の事をやっているの、一日二日の雨で柳田が可哀想と思いつつ歌を作るようなことは、アイヌの人たちにとっては想定内のことと反応があるのかもしれないのです。

わたしとしては、汽車の中からアイヌの人たちの生活を見ながら歌を詠む官僚としての柳田の内面を想像しながら年譜の文章をつくりたいと思っています。

これは、京都の大嘗祭のときに、山に上がっている煙を見て、漂泊の民たちが向こうで噂話をしていると感じる柳田とつながっていると思います。

そうしたことを、どこまで文章に書き表せばよいのかというのが、今の大きな課題です。

(3) 敗戦の日の柳田のこと

もう一つは、あまり古い話ばかりだと面白くないと思いましたので、昭和 20 年 8 月 15 日のことです。

これは有名な話で、昭和 20 年の 8 月 15 日の敗戦の日に、柳田はお昼の詔勅を聞いて日記に「感激不止、午後感冒、八度二分」とだけ書くのは皆が引用するほど知られています。

その日のできごとを柳田自身が語っているのを見つけました。

はじめに、それを見つけた経緯をお話します。

今日は、米田さんもいらしていますが、先日、立川の柳田国男を読む会の人たちが柳田の文章の中から「武蔵野」に関する文章だけをピックアップして注釈を入れる、鎌倉の方たちの『柳田国男の鎌倉断章』と同じような『柳田国男の武蔵野断章』を作りたいということになってアドバイスを頼まれて行ってきたのです。

柳田全集があと 6 巻残っているのです。今度の 34 巻は、没後と残っている未公開のものとか講演原稿があつてそれが 2 冊で、あと書簡が 2 冊入って、別巻があつて、最後がわたしの年譜で 6 冊なのですが、その 6 冊の中に入らないのが、これはもう侃々諤々、後藤先生がご存命の頃から筑摩書房と議論したのが、語彙集も入れて欲しい、座談会も入れて欲しいといていたのですが、筑摩書房の方では、語彙集については全集が完結した時の売れ行きで考えましょうということになっています。

座談会については、全集と切り離して考えてみようということで、こちらの方が可能性があります。

柳田の座談会は、対談も含めて百回近くありますが、わたしは、今年に入ってから、その全部に目を通して、年譜事項を拾ってきました。今までは、いつどこで座談会をやったのかわからなかったのが、雑誌など初出の座談会を見ると、例えば出版社の会議室でやる

とか料亭でやるとか、日にちはいつだとかがわかるわけです。それだけでなく、柳田の発言で、昨年どこそこを歩いたというのが出てきて、今までわからなかったことが、座談会でさらっと語られていることが多いということにびっくりしました。

そこで、立川の人たちに「武蔵野断章」のアドバイスというのがあったので、柳田の座談会の中で、武蔵野に関しての座談会が幾つかあるので、先日、それらを持って立川でお話してきたのです。

その時は、二つお持ちしたのですが、一つは昭和 6 年に今和次郎、小野武夫と三人で野川沿いを歩く、「歩談会」という面白いのをやっている記録です。歩きながら話をしていくのがそのまま載っているのです。それをコピーしたのと、「武蔵野を語る」という加藤楸邨と山本健吉と角川源義の座談会のコピーを持って行って、座談会でこんな面白い話がありますよと皆さんにお見せしながら説明しました。

その中で、年譜に関係することが幾つかあって、そこで 8 月 15 日が出てくるのです。これもびっくりしたのですが、まず武蔵野の風景といえばケヤキだということで、鬼子母神のケヤキはどうになりましたかね。焼夷弾が飛び込んで、それを消すのに何日もかかって消したという話がありますねの次の発言です。戦争の話になってこれから自分は戦争の話をするぞという意欲があって、それははいよいよ戦争のときは、という話をしたかっと思ふのです。柳田は、このように発言しています。

「・・・私は 8 月 15 日の日だつたけれども、非常にきれいな日なんです、空の工合が・・・。ちつと見てみると、それは涙がポタポタこぼれるんだな。だれも見てみないんだ、一人だけでもつて、野川の上流の・・・。」

と言うのです。多分もっと言いたかったのだと思います。野川の上流まで行ってどんなものを見たり、どんなことを考えたりしたのかももっと知りたいところなのですが、座談会のいいところでもあるし、欠点でもあると思うのですが、加藤楸邨が、「どうしても野川に行かなければならん（笑）」と話の腰を折ってしまうのです。残念ですが、「感激不止」の内実が、空を見て涙がポタポタこぼれるというのでわかるのです。

こうなると、わたしが作る今度の年譜は、皆さんにもご意見を聞かなければいけないところですが、柳田の内面がわかるような文章にしなければいけないと考えています。8 月 15 日。天皇の詔勅を聞いて、一人で野川沿いを歩く。綺麗な青空を見ると自然に涙がぼたぼた落ちてくる。家に帰って日記には「感激不止」、午後感冒発熱と書く。というような文章にしなければと思うのです。

年譜のどんなことまで書いて、どんなことをカットしていくかが難しいところですが、柳田の内面が生き生きと伝わるような年譜をつくりたいと努力しています。

以上、年譜作りで、最近面白かった話を 3 つお話ししました。

三. 『故郷七十年』について

(1) 『故郷七十年』成立経緯

次に、みなさんが今年度読み進めていく『故郷七十年』の、わたしなりの読み方や問題提起をさせていただこうと思います。

わたしは、長年の癖で「ふるさとななじゅうねん」と読んでしまいましたが、福崎に行くとき町長さんも含め、みなさん「こきょうしちじゅうねん」と言っています。こだわりはありませんが、訓読みで読ませていただきます。

まず、強調しなくてはいけないことは、この本の成立経緯と、位置づけです。

柳田が、自分の過去をまとめて語っているのは、この『故郷七十年』以外ありません。もちろん、先ほどの対談、座談ではありますが、それも、テーマ別だったり、途中で邪魔が入ったりで一貫していません。

柳田の著作を読むうえでも、柳田の生涯を語るうえでも、この本があつてよかったと思われる方は多いと思います。

では、どのような経緯（いきさつ）で、この本が生まれたのかおさらいしたいと思います。

『故郷七十年』に関してのレジュメで、わたしが対談座談を読んだ中で、『故郷七十年』に関係するところを、あまり知られていない座談なのですがコピーしてきました。これは、昭和24年5月28日、29日に名古屋の夕刊紙『新東海』に載った座談会です。なぜこれを見て欲しいかというと、『故郷七十年』が成立するきっかけになった旅だったからです。これは奈良と京都で開かれる朝日新聞の文化講座に向かう旅でのことです。その講師が、長谷川如是閑と柳田国男で、この日東京を発って、5月28日名古屋で一泊します。ここに、嘉治隆一が朝日新聞社側の随員としてお供をし、三人の旅の一日目です。一日目に本当は講演会がないのに名古屋で降りて、夕刊紙の、たぶん朝日新聞と関係のあった新聞なのかもしれないのですが対談をしています。

言っていることはたいした事ではないのですが、この対談の中でも年譜に反映しなければいけないことが幾つか出てきます。例えば、花屋敷に明治22、3年頃いったことがあるとかですね。柳田の出だしは「ぼくは名古屋が嫌いでね」から始まるのです。長谷川如是閑は名古屋が出身だからということで座談会が成立したようです。

ここで、坪内逍遙の話だとか、土地の話をしたことがわかりますが、対談でこのような話をしたのだから、此旅先の汽車の中とか宿でこれに付随する話が、これより詳しい話が多分たくさん出たのだらうと思います。

嘉治隆一の思い出話にもあるのですが、このあと、奈良に入る前に泊まった松坂の戸田旅館での話のなかに、今度、自分が聞き役になるので、いままでの思い出話を語って下さいと申し出ます。柳田は柳田で、こんなにお互いの旧知の人が重なるのだから、きっと自分の「昔話」もおもしろいものになりそうだから、一度、自分の話をまとめてもらいたいと頼んだと言います。どちらが言い出したことかは、はっきりしませんが、きっと盛り上がった話のなかで、お互いの気持ちが通じあったのでしょう。

この日の約束が実現したのが、嘉治が朝日を退社して、神戸新聞の顧問となつてからの

ことになるわけです。折しも、神戸新聞の創立六十周年を迎える前のことで、その記念事業となったわけです。

昭和 32 年 12 月 14 日、嘉治隆一が、神戸新聞の記者であった宮崎修二郎さんともう一人の記者を連れて来て、聞き書きの第一日目がスタートしました。同席したのが、先ほども話が出た鎌田久子さんで、この三人の共同作業でまとまった本であると言ってもいいと思います。毎週二回、翌年の 3 月 29 日までの 25 回、一回につき 4 時間から長いときで 6 時間に及んだと言いますので、合計百数十時間に及ぶ聞き書きとなります。

(この時期の柳田は、自分の作った民俗学研究所の解散を宣言し、蔵書を成城大学に寄託した後ということもあり心中穏やかとは言えなかったと思いますが、親しい嘉治がよき聞き役となって心休まる時間でもあったと想像できます。)

ということで皆さんがこれから『故郷七十年』を読んでいくに当って、いろんな底本とかどれを読むかということになっていると思うのですが、ここに出席されている飯澤さんが「通信」に書誌的なところを纏められましたが、新聞記事にまず戻って見るというところも一つだと思うのです。で、新聞記事も『定本』になっているので『定本』でもいいのですが、初歩の段階の間違いなども出ていたり、貴重な写真が使われていたりで、新聞連載から読んでいくことをお勧めします。それに宮崎修二郎さんの思い出話などを照らし合わせてみると面白いでしょう。たとえば三木家の写真などをだすと、あんな塀が崩れているような写真を出すべきではないと怒られたとかある。細かいところに柳田がチェックしていたというエピソードと合わせてみてください。

新聞記事がそのまま『定本』になっていて、『定本』には「故郷七十年」とそこに載せなかった部分の拾遺があって、それを見比べるというのが一つの読み方です。

もう一つは、鎌田さんが柳田先生の書き込みなどを元にして、自分で編集しなおしたというのが朝日新聞社版のこれになるわけです。のじぎく文庫版の方を回します。こちらは古本屋で買ったのでぼろぼろで、朝日選書の方は、わたしの手垢でぼろぼろです。朝日選書版はたぶん鎌田さんは読みやすくしたつもりなのでしょうが、あまりにも整理しすぎて、まとめられているので比較の参考資料として読んでみてください。(柳田の書き込み本が発見されればまた違った見方もできると思いますが)

皆さんテキストとして使っているのは、『柳田国男全集』をコピーして使っていると聞いています。全集のいいところは、飯澤さんにも書いていただきましたが、後藤先生の解題で、すべていったり来たり事情とか、順番がどうかわっているのかも一覧表が出ていますのでそれも参考にしながら読んでいくのもいいのではないのでしょうか。

(2) 柳田の校正原稿と削除原稿について

今日、小さな字で申し訳ないのですが、一つ持ってきましたのが当時神戸新聞の若手の記者だった宮崎修二郎さんが、芦屋に住んでいまして、十年くらい前でしょうか、上京された時に呼び出されてお会いしました。その時、『故郷七十年』のゲラを自分が持っていて

もしかたがないので小田さんにあげるよと言われて、貰ったものです。

鎌田さんが学生二人にテープ起こしさせたと言われている本の中には書いていますが、宮崎さんは自分がテープ起こしをしたと言われていています。嘉治隆一さんは鎌田さんに遠慮して、社員がテープ起こしをしたのではなく、鎌田先生の方で努力されたということで、学生さんがテープ起こしをしたと書いています。宮崎修二郎さんは自分がしたと言うのです。多分、共同作業であったのですが、『神戸新聞』に掲載するにあたって、棒ゲラと呼ばれている新聞用のゲラを送るのは、宮崎さんの仕事で、それに赤が入って返ってきたのが、その資料です。

宮崎さんには、朝日新聞社から『柳田国男のその原郷』という、『故郷七十年』に関連する本と『柳田国男トレッキング』という自費出版の本がありますので参考にしてください。

その宮崎さんからゲラ原稿を持っていてもしょうがないので、小田さんにあげるよと言われたわけです。多分、あげるよということはどこかで発表しなさいということだと思うのですが、なかなか発表する機会もありませんでした。

「一人前の話」の校正原稿をコピーしてきていますので、小さいのですが雰囲気だけわかればと思います。

最初の新聞のゲラなのですが、棒ゲラというそうです、新聞記事のように長い棒のようなゲラが最初に出て、柳田のそれを送るとこれは柳田の字に間違いありません。「一人前の話」から「松岡」からこれらは全部赤で入っています。赤で直されたところは、新聞ではそのまま直されていますので、校正原稿としてはこれがあつた。わたしは最初、×で削ったもの、柳田が確かに語ったけれども、文章にしなかったものは何かという興味で見ました。この資料を提供するのだったら柳田はここまでしゃべったのだけれど、ここを削ってこんな風に文章を直したというくらいしか資料の発表の仕方はないのかと思いながらそのままになってしまいましたが、今回をきっかけに、もう一度整理してどこかに発表したいと考えています。

こうやって柳田が赤を入れるということは、数としては少なく、ほとんどは鎌田さんが赤を入れたと思います。ですから、これだけは大切に宮崎さんも保存していたでしょう。

問題はその下の部分なのです。ほんとうはわたしが持っている半分くらいなので、わたしうっかりしてしまして、この下の方は柳田の赤が入っていないからもう活字になっているのだと思っていたのですが、そうではないということが最近わかりました。内容を読んでいくと拾遺のほうに書いている事もあるので、削られているけれども拾遺として残っている文章もあるし、そのまま『故郷七十年』あるいは『故郷七十年拾遺』にも載らずに没になった原稿もありますので、これから検討していきたいと思っています。

さっきの柳田家に養子に行くときの話ですが、優しい束縛を求めて柳田家に行くという一つの伝説のような言葉があるのですが、『故郷七十年』に関しても、家の小ささが原因の兄嫁の不幸があつて、その家の小ささが民俗学を志すきっかけになったと、これも一つの

「伝説」となっていることがあります。文章になっていない一つ一つの言い方を読んでいくと、それ以上に、民俗学を志すことより以前の段階の話と、それから民俗学とはどのような学問なのかという話を柳田はどうも二つに分けていたのではないかというのがわかる資料です。

これも資料として発表すると、新たな話題提供が出来るのではないかと思います。

下に「民俗学とは」とか「⑥」と書いてある字は、柳田の字ではありません。これが鎌田久子さんの字かもしれません。今度、柳田文庫に行ったときに確認してこようと思っています。いずれにしても、編集する立場とすれば、柳田の話から、「民俗学とは何か」という内容を探り出したいと考えるのは当然です。しかし、当の柳田は、ここにある話と民俗学を結びつけるのはまずいとかがえていたようです。

この文章は次のように書かれています。

「昔は、娘が婿をとっても、倅が嫁をとっても必ず主人夫婦とは別の所に寝たものである。襖を隔て寝息までききとれる同じ家に若夫婦を住ませた私の親たちも無謀であったし、仲人をした村の物わかりのいい人も乱暴であった。（これが、柳田の字ではなく、「であったと思う」と校正）

これは単に私の家の歴史を語るのではなく、古い制度の変遷の無雑作、どう変更すべきかを考えなかった、平たくいえば民俗学のなさを語っているわけである。」

と書いてある文章の下に、まぎれもない柳田の字で、「ココデ「民俗学」ヲ出スノハスコシマヅイ」とあるのです。

この文章は、宮崎さんが、『柳田国男トレッキング』で活字にならなかったものとして発表されていますが、この柳田の書き込みには触れていません。

宮崎修二郎さんは、この本の中で、神戸の大震災で自分の家も被災して、散逸した中に自分の大学ノートがあつて、もう一回出所をといわれてもはっきり探せないけれどといわれて発表したのがこの文章です。

わたしたちは、今まで、兄嫁の不幸というのは家が小さくて田の字型で、夫婦二組が暮らすことができないと考えてきました。柳田の「私の母親はしっかりしているから兄嫁が不幸だったけれども、これはしっかりしていない母でも嫁さんは苦勞する」と断言しています。自分は子どもの時はどういうことかよくわからなかったけれども、茨城、千葉に来て、鼎兄さんは、ここで又再婚して、その奥さんはすぐに亡くなるのですが、その兄嫁の母親から兄嫁の弟の不幸も聞いていて繋がってくるのです。

関西の福崎で家が小さかったから不幸であった。それからこちらに来て兄嫁の弟夫婦の不幸を聞いて、家の構造、家族の問題を子どもながらに考えるようになったという文章になっているのです。ただ、この段階で民俗学を出すのではなく、この次に述べているようなことを考えないと民俗学は、やはり「好事家の学問」になってしまうと言っています。

それが、最後の方の「魏志倭人伝だけで古代を論ずるような学者たちには、この問題

は考えられないことだ」と述べたあとの「自分でぶつかり自分で面白いからやるというだけで、共同生活の上の重要性において程度が高いか低いかを考えなかった。これがこの学問がいつまでも好事家の学問とみられて来た原因ではなかったのかと思っているのである。」という文章です。これが、民俗学研究所解散を決めた年の発言と考えれば、奥が深い言葉ととれます。

これも、別の機会に全文発表したいと思っています。

わたしは、この3年間に3回福崎に講演で呼ばれていて、その一回は夏休みの少年地域探偵団みたいな子どもたちに話してきました。そのときに、日本一小さい家と柳田国男はいつまでも好事家の学問とみられて来た原因ではなかったのかと思っているのである。」という文章です。これが、民俗学研究所解散を決めた年の発言と考えれば、奥が深い言葉ととれます。

これは、余談ですが、宮崎さんの本を読んで、わたしたちが驚いたのは、鼎の離婚は、一度ではなく、二度で、その二度目の兄嫁は実家でも追い返されて、ため池に入水自殺をしたと書かれていたことです。わたしたちは、柳田が聞き書きの中で言っていると勘違いしていましたが、どうもそうではなく、『故郷七十年』の新聞連載が始ってから、それを読んだ、再婚した兄嫁の娘か孫に当たる人が宮崎修二郎さんを訪ねてきて、ぼろっと言った言葉から書かれていたことのようにです。「家の母だけの不幸ではなくて、あの子の奥さんで自殺した人がいるんですってね」というようなことを言われたのです。宮崎さんは、その後、もう一度確かめようとして連絡をしたらすでに亡くなっていた。というようなことも出ているので、本当のことはよくわからないのです。

ただ一人目の兄嫁の話は、二年前に、福崎に行ったときに住職の大塚さんとお会いしてお話しましたが、先代の住職から阜さんの家とは親戚関係にあるとは聞いていたのですが、どういう親戚関係かよくわからなかった。天台宗はあの頃は妻帯をみとめていなかったから、もしかしたら正式な結婚ではなかったかもしれないというような話になって、お墓とか過去帳とか系図とか何かわかることがあったら知らせてくださいと言って分かれてきました。その後の連絡はまだありませんが・・・。

このように、校正原稿を見たり、削除原稿を見たりするというのも『故郷七十年』の読みかたとしては必要ではないでしょうかという一つの提案です。

これも宮崎さんからの情報ですが、どれが柳田の自筆の原稿で、どれが口述筆記なのかすぐわかるはずだと言っています。

口述筆記ではなく、柳田直筆のものは宮崎さんの話では3篇あるということです。それは初めの起筆の言葉で、これは日にちもはっきりしていますので、1月9日から連載の前の日の1月8日に脱稿します。それから播州の柳田というのを語っているところがあるのですが。お手持ちでしたら、新聞の連載でいうと14回目なのですが、「播州の柳田」というタイトルの文章があります。これが柳田の自筆だということなのです。確かに読んでみる

と、会話の文章がかぎ括弧であったりしていますので、そうなのかと思うのですが。なぜ播州の柳田にこだわって、まあ柳田は日本全国の柳田姓の分布はどこに柳田があるかずっと関心をもっていたり、あと柳田村とつく村があったらなるべく行こうとしたりしていますので、そうした背景で読んでみてください。(栃木の柳田と富山の柳田村の話は省略)

それと最後の、「筆をおくにあたって」というのが口述の文章ではなく柳田直筆だと言うことです。

(3) 『故郷七十年』の読み方

何回も今日お話したことですが、柳田国男の論考や座談会発言と照合してみることがまず大事ななと思います。この本は、嘉治隆一が言い出して、彼の努力がなければ創れなかった本です。

これからの一年間、「わたしの学問」の章を読むということなので、何故柳田が晩年お米にこだわっていたかという事もお米に関する論文だけ読んでいたのではなかなかわからない問題が、『故郷七十年』を読むと少しわかりやすくなるのではないかと思います。

それから、田中正明さんという方が「わたしの歩んできた道」といって、岩田書院から柳田国男の学問、一生をふりかえりまとめた本があるのですが、ほとんど柳田が『故郷七十年』で語ったこと以外の座談会も載っていて、先ほどの歩談会も載っているのですが、それを読めばこの『故郷七十年』と結びつくという事もあると思います。分厚くて買うのも大変だと思うのですが。

それ以外に、「民俗座談」といって橋浦泰雄とか、お弟子さんですね、それから古い仲間、イプセン会のとときからの秋田雨雀とか意外な取り合わせの民俗座談があります。こういう座談会の言葉と『故郷七十年』を結び付けるというのもポイントだと思います。やさしい言葉とやさしい言葉を結びつける。柳田の論調で難しい言葉と『故郷七十年』を結びつけるだけではなくて、座談会で語っていることと『故郷七十年』を結びつけることによって新しい発見があるかもしれません。柳田が座談会で語っている言葉はとても面白いので、そのような事も出来たらいいのではないかと思います。

あとは、皆さんがなさっている登場人物との関係、登場人物もそれぞれ回顧談を発表していますのでそれらと照合してみるのもどうかなと思います。

最後に、わたしなりの『故郷七十年』の読み方を披露させていただき、何かのヒントにしていただけたらと思うのです。

わたしの愛読書は、柳田国男と先日亡くなった吉本隆明なのですが、この二人がなぜ思想的にすごいのかというと、一行でこちらの関心を広げてくれるということにあります。柳田国男の『故郷七十年』には、そうした一行の力、宝が詰っていると思って読んでいただければいいのかなと思います。

わたしは、「文学の思い出」の中のタイトル「無題の歌」でしょうか。その中で、和歌の題詠から無題の歌の変遷について書いてある一行が今でも心にひっかかっています。和歌

は必ず題詠の和歌を作り、要するに練習をするのだけれど、例えば鶯とか野遊びというように題を師匠から与えられて作るのが題詠の歌です。それは昔からの和歌の作り方だったけれど桂園派の新しい流れの中で、「折にふれたる」という歌の作り方が出てきて、それが「無題の歌」だと。この題詠の練習から「無題の歌」への変遷について述べて、柳田はここで「新旧歌道の過渡時代ではないかと私は思うのだが、まだこのことを説明した人はいない」という文章で終わるのです。

ということは文芸評論家、文学史、短歌史などをやっている人もここには注目していないと柳田は指摘しているのです。わたしはこの一行で、柳田は短歌史だけの話をしているのではなくて、自分の新体詩、「折にふれたる」の五七五七七がいつの間にか新体詩、抒情詩になってきた。そこを文学史的にもだれか追及しないのかと、挑発している文章のようにわたしには思えたのです。以来、わたしの文学観は一貫して変わらず、島崎藤村の『若菜集』を日本の近代詩のトップと書いているけれど、柳田の「野邊のゆきき」はそれよりも数ヶ月前に発表され、初恋の「無題の歌」が恋愛の抒情詩になっていくというを最初の問題関心として持ってきましたが、今でも間違いないと思っています。

こうやって、柳田がこういうことを研究している人はまだいないとか。自分が学問的にもこういうことをやりたかった、お米のことそうですが、ということを手刀直入に語っているところを見逃さないということです。

語ってはいませんが、「学生生活」のなかで「わたしの船長熱はかなり強かった」という一文があります。柳田の「船長熱」を語ることで一つの論文が出来てしまうほどです。すごく、これ面白いことなのです。単純に『故郷七十年』に語られる「船長熱」は立身出世の、明治時代の初期の若者の夢。帝国大学を出て官僚になって偉くなって末は博士か大臣かという夢が、一高時代に両親が亡くなって何もする気が無くなり山に入ろうだとか、船長になって海に出て外海を駆け巡って世界の国と商業するとか、そういうことに取り組もうと思ったという流れになるのですが、それが挫折するのは数学が苦手だったとかです。

ただ、本当に数学が苦手だったから挫折するのかと単純に思うわけですが。柳田は、一生船長熱を捨てきっていません。

大正時代に内田魯庵と書簡の往復をしているのです。内田魯庵の書簡は定本に載っています。それは内田魯庵の娘がバセドウ病で亡くなるんです。7月か。内田魯庵は娘をすごく愛していて、その娘の本を作る。それは丁度、柳田が三陸を歩き、「豆手帳」の旅をしている時です。その本が、自宅から釜石の旅館に転送して届けられます。そうすると柳田は三陸の美しい風景を眺めながら、釜石の宿で内田魯庵を慰める手紙を書く。それがすばらしくいいのです。柳田の娘と魯庵の娘とは仲がよくすでに知っているのですが。

可哀想だったとか、そういう慰めだけではないのです。今回、大津波で被災した唐桑地区よりも北の釜石まで柳田が歩いてきて、気に入った絶景のポイントを列挙していきます。

その絶景のポイント六ヶ所だったと思いますが、そこにあなたを連れて行きたいと言います。内田魯庵は旅が嫌いなようですが、旅が嫌いなら船に乗せて連れてきたい。わたし

が船長になって、内田さんは船内学校の講師になってくださいと。都会からの若者や沿岸の村々から船に乗った人たちに講義をして、ぜひこれを一度実現しようと呼びかけます。魯庵が娘を亡くして落ち込んでいるところに、元気を出させるために、君は旅が嫌いなんだから船に乗ってあげればいいのか、いい景色をみせてあげる。自分は表に出ないでバックアップするという手紙なのです。

その次に船長が出てくるのが皆さんもご存じの通り『島の人生』に入っている、船上大学を作るべきだという提案をする「水上大学のことなど」です。でも何故これが実現出来なかったかというのがあります。柳田は大きな船を借り切って、ここにいろんな分野の学問の人たちを乗せて、全国の港、港をまわって現地の人たちを船に乗せて勉強するとか、展覧会を開くとかを提案してできたら大阪朝日新聞社に財政面をお願いして、何千トン級の船をお願いして実現する、と主張しています。が、これも実現していない。

このなかには、「学問を公衆の財産にする」と言い、「「公衆」の意味が情けなく限られている」と嘆く柳田がいます。（まさに、「公共」論なのですが）

このように柳田が主張したことで、実現していないことはたくさんあるのです。わたしは「船長熱」というこの一言だけでも、柳田が船長になって何をやりたかったのか、それがどのように挫折していったのかというのが分かってくると、また別の柳田像が見えてくるし、学問の広げ方、「公共」のヒントにもなるだろうと考えています。

今回の大地震・大津波からの復興プランにも、大きな船で被災地を回るというのを提案し続けたいと思っています。

このように一行にこだわるという読み方ができるということと、あと気になる言葉に着目するという読み方もあります。先ほどお米のことをいいましたので、お米に関して言いますと、柳田の晩年南島に関する研究の後に、稲作史研究会というお米についてやっています。『故郷七十年』にもたくさん出てきます。柳田が稲作ばかり言っていると、柳田を批判する人たちは、柳田のお米偏重主義が農政や農民の幸せを奪って、画一的な農政になっていったと批判をするのですが、単に『故郷七十年』や戦後の、晩年の文章だけでなくトータルで見たいということ。柳田の言葉を拾っていくと、雑穀に対する評価もバランスよく入っていて、一方的に見ないほうがいいかと思います。木地屋の話も、最初に話したアイヌの話も同様です。

このように、皆さんが柳田の一言、一文から課題をみつけて、新たな柳田像を提案し、また、何か年譜に付け足すような新発見がありましたら、ぜひ連絡してくださいとお願いさせていただいて、今回のお話を終わりたいと思います。

（今回わたしが持っていった のじぎく文庫版の『故郷七十年』は、飯澤さんの見立てで、初版本でありながら、柳田の指摘でいくつか修正し同じ奥付で刊行したものと分かりました。故後藤先生が、『全集』解題で指摘していた本でした。今後の飯澤さんの書誌的研究に期待するとともに、早く、柳田の書き入れ本が見つかることを期待します。情報お持ちの方はご連絡ください。）